

鈴木日出男

SUZUKI HIDEO

源氏物語

歳時記



鈴木日出男

源氏物語歳時記



著者 鈴木日出男 すずきひでお

1938年生まれ。東京大学文学部国文学科修士課程修了。

現在、東京大学文学部助教授。専攻国文学。

日本古代の美的世界に、和歌と物語の双方から光をあてている研究者。「源氏物語」では、新たな〈いろごのみ〉論を展開している。

主な編著書に『完訳日本の古典 源氏物語』1～10(小学館)がある。

源氏物語歳時記

1989年9月30日発行

久世刊行 30

著者／鈴木日出男

発行者／関根栄郷

発行所／株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前2-6-4 郵便番号111

電話 東京5687-2680(営業) 5687-2670(編集) 振替東京6-4123

印刷／明和印刷 製本／積信堂 カバー・表紙印刷／京美印刷

ブックデザイン／渡辺千尋 + Kintaro-gumi

© SUZUKI HIDEO 1989 Printed in Japan

ISBN4-480-05130-9

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。

送料小社負担にてお取替致します。

源氏物語歳時記
目次

春

1

霞

2

若菜

13

梅

24

鶯

33

桜

40

月

56

山吹・藤

77

夏

87

葵

88

橘・時鳥

97

雨

114

涼

131

薔薇

137

なでしこ・とこなつ

142

蛍

148

秋

163

風・野分

164

霧

183

朝顔・夕顔

194

秋草

205

松虫・鈴虫

217

雁

233

露・霜

244

冬、

251

紅葉・時雨

252

冬の夜

269

雪

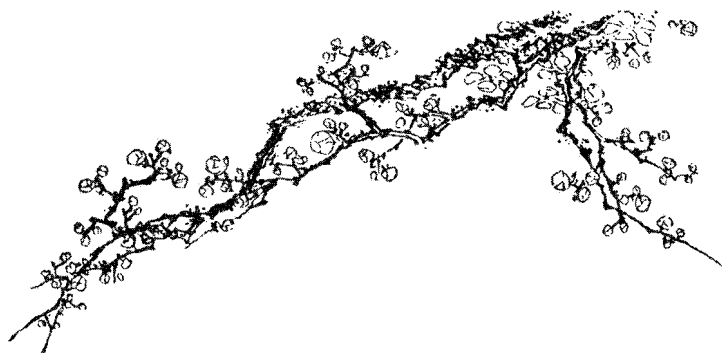
275

あとがき

292

春

霞 若菜 梅 鶯 桜 月 山吹・藤



霞

かすみ

一

光源氏の壮大な邸宅、六条院が完成して、はじめての春がめぐってきた。その正月行事のなかで語られる「初音^{はつね}」巻の冒頭に、次のようにある。源氏三十六歳の元旦である。

年の改まつた^{あした}年たちかへる朝の空のけしき、^{一片の雲もなく}なごりなく曇らぬうららかなには、^{これといった身分もない者の}数ならぬ垣根の内だに、雪間の草若やかに色づきはじめ、^{早くも春めく}いつしかとけしきだつ霞に木の芽もうちけぶり、^{萌え出て}おのづから人の心ものびらかにぞ見ゆるかし。

この一文は、「数ならぬ垣根の内だに……」とあるので、六条院ならぬ京都市中一般の新春の光景を語っている。そして次に、これを受けて「ま^いしていとど玉を敷ける（六条院ノ）御前^{おまへ}は……」と続き、

六条院邸内のすばらしさを述べていくのだが、さしあたり、右の洛中風景としての新春の氣に注目しよう。劈頭、春はまず空からやってくるもの、という趣である。天空には冬空のなごりもなく、一変してうららかな春色を帯びはじめて、霞もたなびきはじめた。それによって、地上では、雪間から草が青々と顔をのぞかせ、木々の芽もふくらみかけている。また、そうした春のきざしのなかで、人の心のびのびした気分になる。この一文は世界を天・地・人の三つに区分する構成法によっている。季節の推移が、天象・景物・人心の三つを、有機的に関わらせながら、一変させていることになる。この秩序は、広い意味での儒教的な世界感覚によっているともいえるようか。

『枕草子』の「正月一日」の段でも、正月の風景と人間を描いて、次のように叙べている。冒頭の、一日から七日にかけての部分である。

正月一日は、まいて空のけしきもうらうらと、めづらしう霞みこめたるに、世にありとある人は、みな姿・容貌、心ことにつくろひ、主君の栄えやわが身の幸運を君をも我をも祝ひなどしたるさま、ことにをかし。

七日、雪間の若菜摘み、青やかに、いつもはそんなものを見なれない御殿の奥で例はさしもさるもの目近からぬ所に、もて騒ぎたるこそをかしけ

れ。白馬見にとて、里人は車きよげにしたてて見に行く。

(三卷本系統の本文による、三段)

特に霞のたちこめる空が、春立つ風情として改まった感じであるという。そして七日になると、雪間から青々と生い出た若菜を食して邪氣を払う。広く民間に行われていた習俗が、早くから朝廷行事と

してとり入れられたらしい。同じ日、宮中では白馬あうまの節会せうかいが行われた。実際には灰色ぐらゐの馬を青色の馬だとして、その馬の色を見ることが邪氣払いになると信じた。白馬あうまの青は当然ながら、若菜の青さにも通じている。冬ごもりから目ざめて生命甦る、その春の季節の色は、邪氣を追ひ払う力を象徴しているのであろう。天空が霞で一変すると、地上では生命の力のこもった青の色が目にしみるばかりである。いうまでもなく、中国の五行説では、「青」は、「東」という方角、「春」という季節と、それぞれ通いあう概念である。この白馬の節会は、直接的には中国渡来の行事であった。しかし、単に大陸からの移入というだけでは済まされぬ問題を含んでいる。前記したように、古来、若菜を食して邪氣を払うという民間での習俗が基盤となることによって、中国的な行事が宮廷行事として定着したものとみられるからである。人々は古くから、その年はじめて生い出る若菜の初々しい青さに生命の甦りを見出しては、その生命力にあやかっ一年の豊穰を祈ったり、自分たちの長寿を念じたりしてきたにちがいない。その時、天空を仰ぎ見ると、確かに冬空とは違う春のきざしがみなぎっているやわらかく地上を包みこむように、霞がたちこめているのだ。

右の『枕草子』の行文も、天象景物に人間を配するという記述方法によっている。元旦らしい天空のもとで、人々が美しく装って祝いあう、あるいは、若菜の青々と見える日に、人々が長寿を予祝して宮中の白馬の節会に参集するのだという。ここでの天象景物は、行事の日の人々の動静の、いわば背景として遠ざけられている趣である。元旦の空や七日の若菜は、宮廷行事の風俗を印象づける美的背景になっている。印象としては、きわめて鮮かであるけれども。

他方の『源氏物語』の「初音」巻冒頭は、これに比べると、天象景物そのものが一つ一つの生命体として生動している。空のたたずまい、雪間の草、霞のなかの木の芽、そして人の心が、たがいに連動しあう固有の世界を動態的に形象している。儒教的な天・地・人の概念はともかく、事物現象の一つ一つが春の到来とともに生命を甦らせるのだと認識されることで、人の心に結びついている。物はいくまでも心のかたちとして定位している。天空も霞も草も、人間の一年、あるいは人間の一生と同じように、変化してやまない生命体だという認識が先行しているのである。これはおそらく、和歌表現の方法について「心に思ふことを、見るもの、聞くものにつけて、言ひ出だせるなり」（古今集・仮名序）といわれる考え方の上に達成されているのだと思う。『源氏物語』の作者は、そのような認識と表現によって、自然と人間の感応しあう固有の世界の中心点に、光源氏という人物を据えようとしているとみられるが、ここではこれ以上に深入りする必要もない。空も霞も草も、人の心とたがいに感応しあえる有機的存在となつてゐることを、さしあたって繰り返しておけばよい。

和歌の表現では『古今集』の時代から、霞が春の景物として固定し、しかも春は霞とともにやつてくるものという連想の類型もできあがつた。天然現象のありかたとしては同じでも、秋のそれを霧と呼んで、二者をきびしく区別するようになった。『古今集』中の次の歌々を読みたい。

春霞たてるやいづこみ吉野の吉野の山に雪は降りつつ

（春上 読人しらず）

霞たち木の芽もはるの雪降れば花なき里も花ぞ散りける

（同 紀貫之）

たとえ冬さながらのように雪が降っていても、天空に霞が立てば春到来だというのである。『古今集』

時代にこうした発想の類型が固定化したと前記したけれども、もちろん前代の『万葉集』時代から霞は春のものという発想が根強くあった。全巻作者不明歌から成る巻十の春の雑歌には、

ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも

(巻十、一八二 人麻呂歌集)

昨日こそ年は果てしか春霞春日の山にはや立ちにけり

(同、一八四三)

冬過ぎて春来たるらし朝日さす春日の山に霞たなびく

(同、一八四四)

うぐひすの春になるらし春日山霞たなびく夜目に見れども

(同、一八四五)

などとあり、これらは前記した『古今集』的な発想類型に近似したものになっている。

春と霞の結びつきを溯ると、実は『古事記』中巻の「応神記」にある、秋山之下氷壮夫と呼ばれる兄と、春山之霞壮夫と呼ばれる弟との、伊豆志袁登売をめぐる妻争いの話につきあたるであろう。

この話では、兄弟の名じたいが重要である。秋山之下氷壮夫とは、「したふ」が赤く色づく意であるから、秋山の木の葉の色づいた立派な男ということになる。他方、春山之霞壮夫とは、春の山の霞の立派な男、の意となる。ともに、秋山・春山の擬人化による命名である。兄が弟に向かって、「もし、なれ(オマエガ)、この嬢子を得ることあらば、上下の衣服を避り、身の高を量りて甕に酒を醸み、また山河の物を、ことごとくに備へ設けて、うれづく(賭)をせむ」と言った。果たして妻争いは、弟の勝利に帰した。母の助力を得た弟が、伊豆志袁登売と結ばれて、一子をももうけたのである。しかし兄は、憤慨するあまり、賭の物品を与えなかった。弟はふたたび母の助力を得て兄を呪詛した。すると、この兄は「八年の間、干萎え病み枯れ」てしまった。その後、兄自身の懇請でようやく呪詛

が解け、もどおりになったという。

この話における兄弟は、春秋それぞれの美に象徴される美麗な神々であるとともに、人間世界に一年一年豊穡をもたらす農耕の神秘をも語ってはいないだろうか。兄の秋山之下氷丈夫が弟の春山之霞丈夫に語る賭の言葉に注意されよう。上衣と下衣を脱ぐのは相手への降伏を意味するが、さらにその降伏の証として「酒を醸み、また山河の物を、ことごと備へ設け」とは、秋の神にふさわしく秋の豊穡を賭として妻を争ったことであろう。また、その賭を裏切ったために弟と母から呪詛されつづけた兄神が「干萎え病み枯れぬ」というのも、凶作続きの八年間だったことを意味する。秋の収穫は、賭を賭として実現することによって得られようとする。この話は、春の神の春山之霞丈夫の神婚を祝福することによって、秋の神の秋山之下氷丈夫に豊穡のもたらされることを語っている。春の予祝と秋の豊祝という関係の構図が、ここにある。人々は、春まだ浅く霞のたなびきはじめるころ、一年の予祝をして農耕作業を開始し、晩秋の紅葉の美しい彩りのころ、豊祝をして一年の農作業に終止符をうつ。こうした農耕生活の歳時のうえに、この話は成り立っているように思われる。

じつは、霞がまっさきに春の到来を告げるものだとする『古今集』の類型表現の背後にも、こうした神話的発想が広がっているのではないか。霞が農耕生活の再生をもたらしってくれるという民俗的な信仰を、霞によって一変させられる天空の美として意識しなおすところで、『古今集』時代の言葉としての霞が定位しているとみられる。『古今集』の次のような歌も注目に値しよう。

春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそ乱るべらなれ

(春上 在原行平)

山にかかった薄い霞を、織り糸の弱い女の衣裳に見立てた歌である。薄衣が山風で乱れて女体が透けて見えそうな幻想の景を通して、霞の向うの山が見え隠れする山あいの朧おぼろな春景が描かれている。いうまでもなく、霞の衣裳をまとう女人とは、春の女神、佐保姫さほひめのことである。このエロティックなまでの幻影は、春の女神が霞をまといてやってくるという神話的な機知によつて描かれているといつてよい。ここでも、春到来を告げる霞は、神話や伝承と無縁でない。

二

前掲の歌がそうであるように、霞は何かを隠すもの、視界をさえぎるもの、という発想もまた『古今集』以来の一類型である。その隠すものという点で、秋の霧とも共通している。せつかくの桜花を隠して見せてくれない、などという不満を前提として、見えざる春の景をかえつて理想的に想像しようとする歌が、すこぶる多い。神話ふうにいえば、霞は意地悪な女神ぐらいになろうか。しかし表現の位相からすれば、霞は想像的視界を拓く巧みな装置の一種になっている。はるかに溯る例だが、柿本人麻呂の「近江荒都おうみ」の歌の霞にも視界をさえぎるイメージがこめられている。

……大宮は ことと聞けども 大殿は ことと言へども 春草の 繁く生ひたる 霞立ち 春日はるひ
の霧きれる ももしきの 大宮処おほみやどころ 見れば悲しも (巻一、二九)

天智天皇の開いた近江の都の跡を訪れた旅人が、その遺跡以上のものを見ようとしても、その眼前に

は何も現れてこない。繁茂する春草とともに朦朧とたちこめる霞が、想像の視界をさえ塞いでいるというのである。過往の栄耀を幻想さえできぬ悲しみが、この歌の抒情となっている。神話的な発想の度合は薄いけれども、霞を想像の視界を拓く装置とした古い例の一つである。降って『古今集』の隔ての霞には、次のような例がある。

(1) 春霞なに隠すらむ桜花散る間をだにも見るべきものを

(春下 紀貫之)

(2) 花の色は霞にこめて見せずとも香をだにぬすめ春の山風

(同 良岑宗貞)

(3) 三輪山をしかも隠すか春霞人に知られぬ花や咲くらむ

(同 紀貫之)

(4) 春霞色のちぐさに見えつるはたなびく山の花のかげかも

(同 藤原興風)

(1)では、霞には意地悪な心があつて故意に桜花を見せまいとしているとして、霞に見え隠れする山の桜を遠望する趣である。(2)は、霞と風とともに擬人化した手のこんだ歌で、霞が花の色を隠すのなら、風よ、せめて香を盗んでくれ、という。梅ならざる桜では香りもほとんどなく、風も運んではくれぬであろう。霞の向うの桜への強い執着から出た、洒脱な表現である。(3)は、額田王の名高い万葉歌「三輪山をしかも隠すか雲だにも情あらなむ隠さふべしや」(巻一、一八)をふまえた表現だが、三輪の神慮によって桜が霞に隠されている趣である。見えざる桜が、神秘的なるものとして想像されている。(4)では、霞に濃淡さまざまあるところから、見えざる花の色の多様さを想像する歌となっている。このように、多く擬人法を用いながら、霞は人を超えた力として桜を見え隠れさせていると発想されているのである。それだけに、想像される花々は神秘的な美を備えて描き出されてくる。

桜花をはじめとして春の景物をさえぎる霞は、春とともにやって来ては、春とともに去っていく。

惜しめどもとどまらなくに春霞帰る道にし立ちぬと思へば

(古今集・春下 在原元方)

ここでは、逝く春を惜しむ歌となっている。一首は、どんなに惜しんでもとどまってはくれない、春霞は自分の帰っていく方角に立って、早くも発^たつてしまふのだから、の意。「たつ」に「立つ」「発つ」の二重の意を含ませてある。前掲の歌々から知られるように、桜と霞などというような取り合せじたいが春の叙景の構図を成していることはいうまでもないが、その霞が単なる背景として添えられているのではない。その見え隠れさせる装置によって想像力を刺激し、それによってしばしば神秘的なまでの景を描き出しているということである。

冒頭でふれた「初音」巻は、正月十四日、男踏歌^{おとこづか}が六条院にもめぐつてきたという叙述でしめくられる。その六条院のありさまを語る一節に、次のようにある。

六条院の女君たち
御方々、

いづれもいづれも劣らぬ袖口ども、
御簾^{おとこしづか}から仰山^{おとこしづか}なほどこぼれ出て
こぼれ出てたるこちたさ、物の色あひなども、曙の空に

春の錦たち出でにける霞の中^{うち}かと見たさる。

実際には女君たちに仕える女房たちが、御簾の下から色とりどりの袖口をのぞかせている。いわゆる出衣^{いだしぎぬ}の風俗の華麗さが、「曙の空に春の錦たち出でにける霞の中」のようだと言えられている。霞によって見え隠れしている春の錦とは、禁断の花園のイメージである。人の力を超えた霞の偉力は、こ